

徳島女学院短期大学

徳山 怜子

目的 かねて研究中の東南アジアの絁布(Sikat)と更紗布(Batik)の文様について、今回はインドネシア領、スンバ島(東部)で用いられる木綿絁布の文様につき、その種差、用法、目的、を考察した。

方法 現地で調達した3枚の腰布(男性用)を中心に例をとって、具体的に考察を試みた  
結果 手織の腰布3枚のうち、1枚はヒンギ・コンブ(Ninggi Kombu)で、これは支配階級の用いたものである。2枚はヒンギ・カウル(Ninggi Kawuru)で、平民の用いたものである。

両者の共通した特徴は、共に天然染料を用いた経緯(括り染法)であり、サイズも織機の関係でほぼ同じ(125cm×250cm程度)である。文様の配列も一定の横列配置であり、布の中央から上下に対称に配置される。しかし染色の色目、文様の選択には二者に異なった点がある。色調は、ヒンギ・コンブは茶赤黒黄白(赤をのまいた色)等多色絁布である。ヒンギ・カウルは藍/色の濃淡による素朴な絁布である。文様は、前者は人像、動物(鳥、馬、赤、えび、たこ、蛇等)をはじめ、オランダを代表するライオンやアルファベットも見られる。殊に特徴のあるものとして首架文(Ardung. アンティン)がある。首を木に刺し重ねた文様で、戦斗の勝利を祈って織られた。首飾風習のパターン化である。

この絁布は衣服の一部ではあるが、祭儀用として重要な意味があり、原始宗教上の神と人間を結びつける物として欠かさないものであり、財産としての価値ももっている。雅気と洗練にみちた文様の魅力は創作者意をのこしたものである。